

「生きられなかった子」との「たましいのつながり」をささえる

—産婆さんが心にとどめてきた死産の語りから現代につなぐ—

立命館大学大学院応用人間科学研究科
対人援助学領域 家族機能・社会臨床
城尾聡子

本研究は、総合周産期母子医療センターでの私の経験から生じた、現代のペリネイタル・ロスカケアに対する問題意識が動機となり、産婆の時代はどのように死産に関わってきたのかについて調査した。1947年までに産婆免許を取得した3名の産婆にインタビューを行い、その語りから母親と家族に対する産婆の死産のかかわりを検討した。

産婆は、経験により体得した産婆技術や直感から「産婆としての誇り」を持ちながら仕事をしてきたが、死産が起こるとそれは後悔につながり、その感覚は鮮明な手の感覚として今なお残っていると語った。そのときあえて「産婆の心の中に死産をとどめる」こととし、話したくない死産の記憶となっていた。またお寺と連携した供養を行うなど「死に対する畏敬の念」を持っており、死んだ子は既に仏さんとして、自分にも母親にも心に折り合いを付けていた。これらの事実は「産婆から助産師への変遷」と密接に関わっており、戦後の時代の変化の影響を常に受けながら産婆たちがいかに揺れ動いてきたかということが分かった。

また、産婆は、死産児と母親・家族との間にある目に見えないつながりを支えていた。産婆のケアは母親と家族の中で亡くなった赤ん坊が穏やかに仏に守られていることを想像できる余地を与え、決して客観的な死産の事実を突きつけることはなかった。日本文化に基づく独自の世界観が、母親、家族、そして産婆までも癒してきたのである。また、産婆は死産をした母親だけに焦点をあてることなく、家族を全体としてみていた。このような死産を通したさまざまな経験から、産婆は役割の学び直しと成長をしており、自分自身の感情をコントロールしていたことがわかった。このことは現代の医療者にとっても大きな学びとなるだろう。

今後、産婆が行ってきた実践を参考に、私たち医療従事者が経験知をもとにして日本の文化に根ざした周産期の喪失のケアを構築していくことが求められる。それは決して専門細分化された職業の者が家族の役割を安易に担ってしまうということではなく、家族の暮らしをとおした、家族にしかできないような視点でのケアである。

産婆の語りは、時代の変化の中で口承や伝承で受け継がれていたためほとんどが消えていった。しかし、産婆の生と死の営みをもう一度見直し、人々の実生活から沸き上がった知恵や経験を知り、現代に受け継いでいくべきである。その上で、多方面の領域の専門家と協力しながら日本文化に即した本来的な意義を持つ周産期のケアにつなげていきたい。